琉球大学学術リポジトリ

連体修飾節における「が・の」交替について

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2007-04-20 キーワード (Ja): 「が」と「の」, 名詞らしさ キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉, Kinjo, Katsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002000998

言語文化研究紀要 *SCRIPSIMUS* №12, 2003

連体修飾節における「が・の」交替について

金城克哉

0．序

近年の文法理論では、次の例文に現れるような連体修飾中の「の」を主格と分析する立場と属格と分析する立場とに別れる：

(1) 花の咲いていない株や、休眠中の株には肥料は必要ありません。
（「趣味」1999年12月号 p.125）

Iwasaki（1994）は連体修飾節の中では head noun によって属格が与えられ、それが「の」として現れる場合と、そうでない場合（head noun が [+Attributive] で属格が実現されずに、さらなる格付与がなされる場合）に別れるとする立場をとる。山橋（1998）は「の」を属格とする分析を支持し、西岡（1997）は「ガ・ノ交替文」を２種類に分類し、「の」格名詞句と述語との間に介在要素を含む分を「擬似ガ・ノ交替文」、介在要素を許さないものを「真性ガ・ノ交替文」とし、「真性ガ・ノ交替文のノ格主語はガ格主語と同様、連体修飾節の S／IP 内にある」と分析する。

こういった文法理論を用いた格に関する議論とは別に、連体修飾節に現れる「が・の」がどういった条件下で交替可能であるのか、またどういう制限があるのかという議論がある。今回のこの研究ノートではこの後者の点からみた「が・の」交替についてまとめてみた。時間的な制約もあり、分析という段階にまでは至らなかったため、新聞、歌詞、エッセイ、雑誌など様々な分野に現れる連体修飾の実例を提示し、問題点を指摘するに留める。

1．「の」が現れる連体修飾例

以下の実例では、「の」が現れる連体修飾中では状態を表す述語（「ある」「ない」「分からない」「知っている」等）が用いられる傾向にあることがわか

るが、これはそういった「傾向がある」というだけで、一般化することはできないと思われる。

(2) 地球はこの宇宙の中では珍しい星である。何が珍しいかというと、「音のある星」なのである。(「植物」p.10)

(3) 声だけで相手が誰であるか判断できたり、雑音の中から自分に危険のある音色が聞こえればすぐに身を避けるし…(「植物」p.12)

(4) 何故かといえば、勝ち負けに関係のない人間というのが、一番公正な立場に立てる人間だからである。(「蓮」p.52)

(5) フロイト自身のつかまえてきた“真理”というのは間違っていたから、フロイトは…(「蓮」p.67)

(6) 新しい理論を提唱する人間は、往々にして彼の生きる時代に屈服して、つかざるをえない嘘をついてしまう…(「蓮」p.75)

(7) …正しいんだか正しくないんだか判定のしようのない訳の分からないテーゼを持ち出してきて…(「蓮」p.165)

(8) 初めはエイズにあまり関心のなかった人間が、取材を続けていくうちに、感染者やその家族…(「エイズ」p.11)

(9) それは、エイズに関してあまりにも無知で、患者や感染者のおかれている状況を想像できなかったからだ。(「エイズ」p.45)

(10) 法的根拠のない日の丸・君が代を学校行事で強制するのは反対
(「新報」2000年3月8日夕刊p.11)

(11) 教会へも出かけないような連中は、社会からはみ出した、信用のおけない部類の人であると思っている。(「日本人」p.iii)

(12) それを悪いと言っているのではないが、もう少し地に足のついた整った答え方はないであろうかということである。(「日本人」p.vi)

(13) しかしこれは間違いなく日本政府、文化庁の発表した公式の数字である。(「日本人」p.4)

(14) 私のもっともよく知っている人がいる。彼はおよそ宗教的雰囲気とは無縁の環境に育った。(「日本人」p.7)

(15) 第25図は色々な攻め方のできる局面である。(「米長」p.22)

(16) 歩は一番動きの少ない駒であるが、実はこの…(「米長」p.10)

(17) ここで(後手)2三歩の浮かぶ人は、前頁をもう一度読み直していただきたい。(「米長」p.13)

(18) 購入するときに、なるべく傷みのない株を選ぶことが前提ですが…
(「趣味」1999年12月号 p.16)

(19) ホーリーを使ったリースのある玄関。 (「趣味」1999年12月号 p.16)

(20) 鉢植えは日光の良くあたる、風通しのよい場所に置きます。
(「趣味」1999年12月号 p.110)

(21) 収穫の終わったウンシュウミカンで、ミカンハダニやカイガラムシが発生しているときがあります。 (「趣味」1999年12月号 p.110)

(22) 運転手は黒人席のある後部にやってきて、M・Lと引率の先生に席を白人に譲るように命令した。 (「キング」p.29-30)

(23) …M・Lは聖書の教えをすべて信じることはできなかったし、父親の行っているような説教に疑問をもっていた。 (「キング」p.31)

(24) 一部の白人のもっている黒人にたいするやさしさをすべて否定してしまうことは… (「キング」p.34)

(25) マルクスの描いた資本主義は今日のアメリカの資本主義の一部としかにていないからだという。 (「キング」p.44)

(26) もちろん、二人の通う学校は人種統合されているので、白人学生といっしょに勉強することにはなっていたが… (「キング」p.46)

(27) 私の愛したあなたのすべてが
崩れてしまうのがこわいだけ
だから　何も言えない (「シャツ」)

2.「の」と交替できない例

以下の文では連体修飾中に「が」が用いられているが、それを「の」と交替すると容認度が落ちる。

(28) 全国の四十六新聞社が昨年八月からリレー形式で開催してきた「日本列島横断シンポジウム」の総括シンポが七日、東京都港区で開かれた。
(「新報」　2000年3月8日)

(29) …代金としてエ社が振り出し石橋産業が裏書した額面総額二百三億円の約束手形を受け取りながら株を引き渡さず、うち約百七十九億円分をだま

し取った疑い。

（「タイムス」　2000年３月８日）

(30)　新日本フィルハーモニー交響楽団の主席オーボエ奏者でもある古部賢一が昨年三月に行ったリサイタルのもようを送る。

（「タイムス」　2000年３月８日）

(31)　ところが、八重山地区パインアップル対策室が昨年十一月、農家に実施したアンケートでは、四分の一の五百トンとか集まらないことが判明した。

（「タイムス」　2000年３月５日）

(32)　ワシタカ科の猛きん類で、最も大形のクロハゲワシが石垣島の沿岸付近で衰弱しているところを保護され、…石垣市立大本小学校の飼育室へ収容された。

（「タイムス」　2000年３月５日）

(33)　デジタルカメラの販売が急拡大する中で、一般向けの高画質機種が次々に登場している。

（「タイムス」　2000年３月８日）

(34)　その後、中原さんだけが店に戻り、入り口付近で一人でいたところを、二人組の一人が再び入ってきて至近距離からいきなり撃ったという。

（「タイムス」　2000年３月８日）

(35)　もちろん、恋愛結婚が普及し定着していく過程には、個々人の自由と自立への欲求が動因として存在したことはいうまでもない。

（「女性学」p.77）

(36) …70 年代に行われた同様の調査の結果、女性がデートの時にバカなふりをする傾向は、多少減少してはいるものの、…

(「女性学」 p.66)

(37) 母親が子育てをする習慣の社会では、男の子の方が同性モデルに接する機会が少ない。

(「女性学」 p.27)

(38) ただ生きる環境の条件によっては、あとから改良がされたり、消滅したりした部分はたくさんあるに違いない。

(「植物」 p.54)

(39) しかし、私が驚かされるのは、植物が、自分が食料を消費しなくなっただけではなくて、他の生物の食料にもなりうる運命を背負ったことである。

(「植物」 p.60)

(40) これによって食料を消費する生物がいなくなったわけだから、食料不足問題は当然のことながら解消していく。

(「植物」 p.60)

(41) 高いホテルの窓から見える
どこかの部屋の窓明かりが
一つ一つ消えていく度に
逃げ切れたような気分になる (「THE END」)

(42) 君がふざけて僕を押したひょうしに
ころんだ空はこの街にない (「Witch Hazel」)

3．「が・の」交替に関する制約について

3－1．最近の研究について

序で触れた「主格・属格」といった文法的な議論とは別に、友田英津子(1994）は久野（1976）の主題制限（「関係節は、その中心名詞についてのべたものでなければならない」）を引用し、次のような仮説を提示している：

(i) この主題制限はGNC（が・の交替変形）が適用された関係節に対しては、そうでない場合に比べて、より厳しく働く、

(ii) 挿入要素の介入によって、関係節全体が中心名詞について述べたものでなくなると、GNCの適用は阻止される。

ここでは詳しく触れることはできないが、この友田の主張には疑問が残る。例えば、友田は「子供たちが／*の皆で勢いよくかけ登った階段」と「子供たちが／の皆で仲良く通る散歩道」という文を比較し、前者で「の」が認められない理由を「一回きりの出来事によって階段を特徴づけようとしている」ためであるとするが（p.39)、前者と後者共に文法的でないと判断する話者に対しては説得力を持たないし、本文(1)の例のように一時的な状態であるにも関わらず「花の咲いていない株」のように「の」を用いる場合がある。

また、和田学（1993）は「が・の交替」を促す要因として「フォーカスの解釈」を挙げているが、「文の中でその句だけが新情報であるもの」という定義にも関わらず、「新情報・旧情報」という分析に必要な談話の流れの中での連体修飾の現れ方という分析方法はとっておらず、説得力に欠けると思われる。

3－2．名詞らしさについて

セクション2で提示した例に見られるように、「が・の」が交替できない場合がすくなくない。よく知られている制限としては(i)主語と述語の間に介在要素がある場合（上記(28)(30)他を参照）や、(ii)2つの節が存在する場合（上記(29)を参照）などがある。しかし、どういった要素ならば容認されうるのか（友田(1980）の指摘するような一時的状態を表すようなものなのか)、介在要素がない場合でも「が・の」が交替すると容認度が落ちるのはなぜなのか（上記(40)を参照)、といった問題に対する明確な答えは得られていない。

この研究ノートでも「が・の」交替についての明確な制限を提出することはできないが、以前友田（1980）で触れられていた「名詞らしさ」を改めて見直しつつ「が・の」交替を考えることは意味があると思われるので、今回はこのことに触れて締めくくりとしたい。

友田（1980）は「の」を用いると「が」を用いた場合よりも修飾節全体の「名詞らしさ」が高まると主張する。

(43) 炎が／＊の　ゆらゆら動いているろうそく

上記(43)では「ゆらゆら」という副詞が一時的な状態を表しているが為に修飾節全体の名詞らしさがそこなわれ、「の」との交替ができないというのが友田の主張であった。では名詞らしさという点について次のような文で「が・の」の交替が起こらない現象はどう説明すればよいのであろうか。

(44) 県が計画中の那覇市安里交差点の横断地下道に周辺住民から防犯面を不安視する声が出ている。

（「新報」2000年3月20日）

(45) その他、とくに地方の地域社会では、生みの親が不明の場合、兄妹（または姉弟）とか、ひどいときは…

（「論理」）

(46) その中には、私の長男（11歳）と同年配くらいの子も、次男（7歳）と同じ位の子も、それに今が可愛い盛りの長女（2歳）くらいのもいる。

（「論理」）

(47) 前出…の「母親の就業と家庭生活の変動」調査によれば、母親がパート勤務の子どもは実は…

（「女性」）

名詞らしさが問題となるのであれば、こういった連体修飾の「が」が「の」と交替しても何ら不思議ではないが、実際にはこれらの例では「の」を用いると容認度が極端に低くなる。

4．結び

日本語学習者（中級のレベル）から今回取り上げたトピックについて時折

「ここは『の』ですか、『が』ではありませんか」という質問を投げかけられる。「どちらでも構いません」というのはあまりにも乱暴で、かといって「状態を表す述語の場合に多用される傾向にあって、主語と述語の間に介在要素が…」などという説明をすれば学生が混乱するであろうことは容易に想像がつく。今回は研究ノートという形で収集した資料を提示し問題点を指摘する段階にまでしか進むことができなかった。格付与という文法議論とは別の角度からこの現象を見直し、今後さらに調査研究を深めていきたい。

参考文献

Iwasaki Yasufumi (1994) GA/NO Conversion in Japanese and Case Theory.『鹿児島大学文科報告 30』pp.1－27

友田英津子（1980）「が／の交替変形と名詞らしさについて」『武蔵野女子大学紀要』pp.101－105

友田英津子（1994）「が／の交替変形と特徴づけについて　―関係節の場合―」『淑徳短期大学研究紀要 33』pp.39－46

西岡いずみ（1997）「連体修飾節におけるノ格主語」『九大言語学研究室報告 18』pp.33－49

山橋幸子（1998）「節構造の普遍性―「が／の」の交換」分析」『札幌大学文学部紀要　比較文化論叢Ⅰ』pp.45－58

和田学（1993）「「が／の」交替の制約とフォーカス「が」」『九大言語学研究室報告 14』pp.69－80

用例出典（（　）内は省略したタイトルを示す）

井上輝子	「新版女性学への招待」	ゆうひかく選書	（「女性学」）
池田恵理子	「エイズと生きる時代」	岩波新書	（「エイズ」）
上坂昇	「キング牧師とマルコムX」	講談社新書	（「キング」）
NHK出版局	「趣味の園芸」	NHK出版局	（「趣味」）

大貫妙子	「新しいシャツ」		(「シャツ」)
沖縄タイムス社	「沖縄タイムス」		(「タイムス」)
梶村昇	「日本人の信仰」	中公新書	(「日本人」)
神津善行	「植物と話がしたい」	講談社	(「植物」)
橋本治	「蓮と刀」	河出書房新社	(「蓮」)
本田勝一	「殺す側の論理」	朝日文庫	(「論理」)
槙原敬之	「THE END OF THE WORLD」		(「THE END」)
	「Witch Hazel」		(「Witch Hazel」)
米長邦雄	「米長流必ず勝つ基本手筋」	有紀書房	(「米長」)
琉球新報社	「琉球新報」		(「新報」)